

第2章 救いの9つの面

第五 告白

告白について、次のアウトラインで学びます。

1. 「告白」の意味
2. 「告白」の特徴 2つ
3. 「告白」に関連する聖書箇所

1. 「告白」の意味・・・告白は、再生と信仰とに密接な関係がある

- (1) ヨハネ 3 : 1～15 再生について、イエスとラビ・ニコデモとの対話

- ① 15節 再生は、信じる者に永遠のいのちを与える神のわざである。
- ② 6節 再生は、聖霊によって生まれることである。
- ③ 5節 再生は、人がもう一度生まれることである。

- (2) 再生の手段は、4つ。これらすべてが、そろうことが必要。

- ① ヨハネ 1 : 13 神の意志 : 人は神の意志によって再生させられる。神のみこころは、人の再生の源である。
- ② ヨハネ 3 : 6～8 聖 霊 : 再生のみわざを行うのは、三位一体の神のうち、聖霊なる神である。
- ③ ヨハネ 3 : 11、ルカ 16 : 31 神のことば : 再生は、人の側での信仰と同時に起こる。その信仰の内容を人に与えるのは、神のことばである。人が再生されるためには、その前に神のことばを聞かなければならない。人はそれを信じなければならぬ。それを信じると、同時にその人は再生され、神の子とされ、再び生まれる。
- ④ ヨハネ 3 : 13～18 信 仰 : 聖霊が新しい誕生をもたらすためには、人の側には信仰が必要である。信仰なくして、再生あるいは新しい誕生は起きない。

- 13節 「人の子」・・・旧約聖書ではメシアの呼称はいくつかあるが、ニコデモはじめ当時のイスラエルの人々がメシアの呼称として通用していたのは、「ダビデの子」。王としてメシアの王国を支配し、地上に正義と平和を確立すると、旧約聖書で預言されている(イザ 17 : 11)。しかし、メシアは「ダビデの子」としての働きをする前に、受難のメシア預言を成就しなければならない(イザヤ 52 : 13～53 : 12、民 21 : 4～9、ヨハネ 3 : 14)。イエスは、あえて「ダビデの子」という呼称は用いず、「人の子」という呼称を用いた。「人の子」もまたメシアの呼称である。

➤ ダニ 7 : 13、ゼカ 12 : 10 → マタ 16 : 27、24 : 30、黙 1 : 7

➤ ダニ 10 : 4～9、12 : 6～7 → 黙 1 : 12～17

- (3) 信仰の内容、その中心はメシアである（I コリ 15：1～4）
 - ① メシアは、私たちの罪のために死んだ
 - ② メシアは葬られた
 - ③ メシアは、三日目によみがえった
- (4) 信仰と人の内側の要素との関係
 - ① 思考・・・伝達された福音（使徒たちから連綿として続く体験的知識の証言）を理解する、聖書のことばを神のことばとして理解する。
 - ② 心・・・理解した福音を真実であるとは同意し、確信する
 - ③ 意志・・・メシアを信頼し、福音に従うことを自ら喜んで選択する
- (5) 信仰と告白の関係・・・人が信じる時、その人の内側では、思考・心・意志が働いて、信仰の内容を自分のことばとして言い表している。これが、信じるということである。同時に、それが「告白する」ということである。実際に声に出して言い表す人もいるが、大抵の場合、声に出さずに、その人の内側で言い表される。

2. 「告白」の特徴 2つ

- (1) 告白は、「会衆の前に立って、信仰を表明すること」ではない。
 - ① 伝道集会で、救いへの招きがされ、前に出てきて講壇のもとに来るようにすすめられることがある。そして、聴衆の前で、「私はキリストの福音を信じます」と宣言する。これは、救いにかかわる「告白」ではない。
 - ② 救いにかかわる「告白」は、信じるときにその人の内側で同時に起きている。前に出てきて聴衆の前で信仰の宣言をする人は、前に出ようとしたとき、すでに信者であり、救われた人である。
 - ③ 聴衆の前で信仰を表明することは、イエスをメシアとして受け入れたことを証しする「証言」である。（参考 サマリヤの女の証言 ヨハネ 4：39）
- (2) 告白は、信じるときにその人の内側で起きることであって、信じるということの一部分である。
 - ① 信仰から離れて、形だけ告白するというのは、救いとは何の関係もない。
 - ② イエスを信じると表明しても、「処女降誕はあり得ない」、「復活や昇天も霊的現象であって、実際のからだを伴うものではない」、「イエスは神などではなく立派な愛の実践者であった」・・・など、福音の内容から全く外れた理解の上にあるなら、それは救いに至る信仰でもなければ、告白でもない。

3. 「告白」に関連する聖書箇所

(1) マタ 10 : 32~33 32 ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。33 しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。

- ① この箇所は、文脈の理解が重要。ここでイエスは、十二弟子をイスラエルの町々に遣わそうとしている(マタ 10:1~5)。十二弟子を受け入れるかどうか、それはイエスをメシアとして認めるかどうか、である(マタ 10 : 40)。
- ② 「人の前でイエスを認める者」と「人の前でイエスを知らないという言う者」とに、イスラエルの人々は二分される(10 : 32~33)。イエスを認める者たちは、そうでないイスラエル人たちから激しい迫害を受けるであろう(マタ 10 : 17、21~23、34~36)。
 - 分裂・・・ヨハ 7 : 40~52、9 : 13~16、10 : 19~21、10 : 40~42、11 : 45~46、12 : 10~11、12 : 37
 - 旗色を鮮明にしない第3のグループ・・・ヨハ 7 : 12~13、7 : 50~52、9 : 18~23、12 : 42~43「指導者たちの中にも、イエスを信じる者がたくさんいた。ただ、パリサイ人たちをはばかり、告白はしなかった。
会堂から追放されないためであった。彼らは、神からの栄誉よりも、人の栄誉を愛したからである」
- ③ そのような迫害を恐れず、イエスを信じ続けるようにすすめられる(マタ 10 : 22、24~31、37~39)
- ④ イエスは旧約聖書の預言の通りに現れたメシアである。
 - バプテスマのヨハネは公然とイエスをメシアであると宣言した。
 - イエスは、メシアでしか行ふことのできない奇跡をして見せて、イスラエルの人々にご自分がメシアであることを証明した。
 - このイエスをメシアとして認めることは、当時のイスラエルの人々の民族的責務であった。にもかかわらず、イエスを悪霊に憑かれた者として拒否した(マタ 12 : 24、ヨハ 10 : 20)。
 - メシア拒否は、当時の世代のイスラエルの人々が犯した民族的罪である。イエスはこの罪を、「聖霊に逆らう冒とく」と言われた(マタ 12 : 31~32)。
- ⑤ イエスを人の前で認めるかどうか、それは、当時のイスラエルの人々に問われた責任であって、現代の私たちに適用されるものではない。
 - 「聖霊に逆らう冒とく」(マタ 12 : 31~32) は、当時のイスラエルの人々が犯した民族的・歴史的罪であって、現代の私たちには全く関係のない罪である。

- マタイ 10 : 33 「人の前でわたしを知らないと言うような者」とは、マタイ 12 : 32 「聖霊に逆らう冒とく」と同じである。いずれも、イエスを直に見ながら、そしてイエスの奇跡を見ながら、イエスをメシアとして信じないで、イエスを悪霊に憑かれた者と言って拒否した人々である。
- (2) ロマ 10 : 9～11 9なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。10人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。11聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」
 - ① 救われるためには、心の中でイエスの復活を信じるだけでなく、口で「イエスは主である」と告白することが必要であるのか？ もし、そうだとすると、救いは、口で告白するという人のわざによることになる。そうではない。
 - ② 使徒パウロは、「口で告白する」と「心で信じる」とを区別しているのではなく、同じ一つのことを指して、2種類のことばで表現している。そして、それも2回続けて語り、1回目は「告白する→信じる」(9節)、2回目は「信じる→告白する」(10節)と逆の順序で語る。これは、弁論術で「交差対句法」と呼ばれる表現方式である。
 - ③ 「口で告白する」と「心で信じる」とは、同じことである
 - 9節は、救われるために、人は何を告白するか、あるいは何を信じるのか、その内容を語る。ここでは福音の三要素のうちの3番目「神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださった」をとりあげている。これは、福音の三要素を代表させて述べているのであって、三要素全体が告白すべき、また信じるべき信仰の内容であることは、当然の前提である。また、イエスの復活は、神がイエスを主ともキリストともされたことの証しである(使徒 2 : 32～36、ロマ 1 : 4)。よって、告白と信仰、それぞれの内容も同じである。
 - 10節では、信じることと告白することの順序を逆にして述べる。同じ一つのことを指して、2種類のことばで表現し、1回目は「告白する→信じる」(9節)、2回目は「信じる→告白する」(10節)と逆の順序で語る。これが、弁論術で用いる「交差対句法」の表現方式である。
 - 10節では、「義と認められる」と「救われる」とある。これも同じことを指して2種類のことばで表現している。罪びとの罪はイエスの十字架に負われ、イエスの義は罪びとの上に転嫁され、罪びとは「無罪である。義人である」と宣告される、これが「義と認められる」ことであり、「救われた」ということである。
 - 11節では、これまでの「口で告白する」と「心で信じる」の2つのことが、「彼に信頼する＝信じる」という一語に集約される。ここで、告白は

信仰の一部であることが明らかである。

4. まとめ・・・救いにつながる5つのこと、【再生、転回、信仰、悔い改め、告白】、これら5つの関係を図示すると次のようになる。

